

序言

近年わが国における野生動物をめぐる生息状況は、大変きびしいものとなっている。神奈川県においても、1996年にまとめたレッドデータ調査に明らかなように、哺乳類をめぐる状況は大変きびしく、多くの種が分布域を減少させたり、個体数を減らしたりしている。

きびしさのおおもとは、開発にともなう生息地の減少があるのだが、中大型哺乳類にあっては獣害とよばれるヒトとの軋轢が問題をさらに深刻なものとしている。獣害の問題は、単なる保護・保全の問題から、経済問題・社会問題にまで発展した結果として、動物と人間との関係を非常に複雑なものとしているのである。

博物館の総合研究「野生動物との共存を考える」では、このような「害獣」と人間がどうしたら共存できるかを主なテーマとしていた。博物館周辺にも生息し、実際に獣害が大きな問題となっている、ニホンザルを取りあげて、調査研究を行なった。1996年から98年までの3年にわたって行なった研究では、「基礎調査」「情報発信・ネットワークづくり」「環境教育」を柱に、各分野の専門家との共同作業を行なってきた。博物館のメンバー広谷浩子（代表）、山口佳秀に加えて、外部研究者として（株）野生動物保護管理事務所の岡野美佐夫氏、京都大学霊長類研究所ニホンザル野外観察施設の渡邊邦夫氏、日本獣医畜産大学の羽山伸一氏、愛知教育大学の金森正臣氏に協力を依頼し、さまざまな局面で共同調査・資料提供・助言などにご協力をいただいた。

この研究の成果に加え、各方面の専門家からの寄稿をつのり、ニホンザルの現状と将来について考えるための材料を提供してもらい、報告書としてまとめた。各地のニホンザルの現況紹介だけでなく、過去のヒト・サル関係をたどる試み、野生動物をめぐる社会情勢（法の整備、経済）、環境教育的視点からの実践報告などについても盛りこみ、さまざまな視点からサルとヒトとの共存の問題を考えてもらえるような構成とした。

ニホンザルの被害問題は非常に複雑であり、一時代前のようにニホンザルの野外研究者が片手間に関わっていても解決に結びつかないし、それが許されないような状況になっている。今後は実態調査、分析データをもとにした保護管理計画の立案、防除技術の検討と開発などのすべての分野において、プロフェッショナルが台頭してくるべきだと思われる。博物館という立場からこの状況に関わるとしたら、情報発信と教育・啓蒙の方途を磨いていくことに尽きるだろう。この総合研究と報告書によって、この分野の重要性が強く認識され、今後の問題点が整理されていくものと期待する。

平成12年3月25日

神奈川県立生命の星・地球博物館
総合研究代表 広谷浩子